様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：８２６２０
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｈ０３１７１

研究課題名（和文）対外交流史の視点によるアジア螺鈿の総合的研究ー大航海時代を中心にー

研究課題名（英文）An Integrated Study of Mother-of-Pearl Ornament in Asia from the Viewpoint of the History of External Exchange, Especially Focusing on the Age of Discovery

研究代表者
小林　公治（Kobayashi, Koji）

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化財情報資料部・特任研究員

研究者番号：７０１９５７７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の成果には、調査・口頭発表（含ポスター発表）・印刷物やネットデータの公刊、の三種がある。また成果が得られた場合はできるだけ速やかな公表を心がけてきた。調査については国内外各地の博物館・美術館、また宗教施設や個人宅などにおいて相当数の対象文化財に対する実見調査を実施した。口頭発表については国際シンポジウム「南蛮漆器の多源性を探る」を2017年に主催したほか、国内外各地の学会や研究会において単独、あるいは関係研究者らとの共同発表を行った。公刊物への成果公開としては、国内外学術誌への論文寄稿、また図書刊行物があるほか、口頭発表したものの多くは学会要旨集など内容を速報した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　現在・未来を考える時、我々が持つ唯一の参照事例は過去の歴史に学ぶことである。また歴史研究は文献史料を中心に行われているが、モノによる歴史研究はマイナーではあるが有史時代にあってもきわめて有効であり、積極的に進めていく必要がある。
　本研究ではアジアの螺鈿を主な対象として実証的な研究を進め、これまで世界各地で造られてきた螺鈿という装飾法は、実は孤立的独自的に生まれたのではなく、各地各時代の相互文化交流によって生まれたこと、そして交流の結果、独自のかたちや表現が生まれたことなどを具体的に論じた。またこうした成果は機会を捉えて口頭発表し、できるだけ多くの人々へ直接的に語りかけて公開・共有を図った。

研究成果の概要（英文）：　Research results by this grand study can be categorized into three kinds: object researches, oral presentations (including poster presentation) and publishing of articles or digital data. And representative had been endeavoring to open research result as soon as possible.
　We could have many times of direct objects research at museums, at religious facilities or private residences world wide. About oral presentation, the representative organized international symposium 'In Search of Multiple Origins of Namban Lacquer' in 2017 and made numbers of solo or cooperative presentations at academic conferences in Japan and abroad. And the research members have some articles on academic journals published not only in Japan but also in foreign countries. In addition to that, there are presentation abstracts compiled on academic conference preliminary reports.

研究分野：物質文化史

キーワード：螺鈿史　アジア　南蛮漆器　唐草文　樹脂・漆　キリスト教器物　レイピア　工芸史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

螺鈿とは、貝の真珠光沢を平面装飾に利用した技術および器物の総称である、と代表者は定義している。虹色に輝く真珠の輝きは、古来より首飾りや指輪などとして人々を魅了してきたが、螺鈿はこうした真珠の輝きを平面に置き換えた装飾だと言える。また小さく丸い天然真珠に替え、夜光貝やアワビ貝の真珠光沢を平面装飾として展開するためには、往々にして遠方からもたらされる希少で貴重な素材であるこれらの貝を入手し、固く厚い貝殻を手間暇かけて切断研磨の上、文様の形に切り出して器物に装着する必要がある。こうした高級な材料の利用や多大な労力を必要とする螺鈿は、歴史上、膨大な富と強大な権力を持つごく一部の社会的上位層のみに所有されてきた。またこれにより螺鈿は、それを造らせた人間、所有する者の富裕さや権力を外部に対しておのずと感知させる、宝器にも似た性格を持つ特異な装飾品ともなっていた。

世界最古の螺鈿はメソポタミア文明と中国殷周時代にあるが、その後の歴史は未だ明らかでない。しかしながら技術的な観点から、東アジアでは中国唐代の長安（西安）、西アジアではおそらくシリア（ダマスカス）が現代まで続く螺鈿の起源地であったと思われ、そこから制作技術がアジア各地に伝わって展開していったと見られ、その過程はまず 8 世紀以降に日本や朝鮮半島で、15 世紀頃までにはインドやトルコにおいて、その後にはタイやベトナムと言った特定地域など、さらに太平洋の島嶼部などにまで広がるという段階をたどり、伝わった各地では地域独自のスタイルを持つ螺鈿器が造られるようになっていった。

代表者は本研究開始までに進めていた上記のような研究によって、まずアジアを中心に広がり、それからグローバルな展開を示すに至った螺鈿は基本的に「アジアの特産物」的装飾と見られること、また最古の螺鈿はごく少数の地域にのみに認められ、以後時系列的にアジア各地、さらには世界的な展開を示すことなどから、その制作は多数の地域で独立的に発生しそれぞれが個別単系的に展開したのでは無く、中心となった少数の先進的地域からの影響や技術・工人の移動が起こり、それが流行り廃りを経つつも波状的に各地に伝わっていくことで現在の分布に到達した可能性が高いという全体的また総合的な仮説を持つに至っていた。

２．研究の目的

上記のような問題意識、研究背景を受け、本研究ではこの仮説を具体的に跡付けていくことをまず全体的な目標とし、その上で人類が地球的規模で移動を始めた 15-17 世紀（大航海時代）を中心的な対象時期に設定した。

この時代、特に 16 世紀後半以降には、ポルトガル人やスペイン人によるインド以東の「アジアの発見」と交易の結果、「アジアの特産物」である螺鈿は西方ヨーロッパや中南米においても知られることとなった。またイベリア半島では今でもインド製樹脂地螺鈿器、日本製南蛮螺鈿漆器、パレスチナ製螺鈿教会器物がキリスト教会などに伝えられているが、この事は大航海時代に起きた地球規模の交流によって螺鈿が世界各地に広く流通するようになった事実を反映している。また日本においては 16 世紀頃には衰退状況にあった螺鈿が、17 世紀に前後する頃から制作が始まる大量の南蛮「螺鈿漆器」の装飾に組み込まれて輸出される、といった大きな変化が起きている。また技術的にも、それ以前に使われていた夜光貝からアワビ貝へという貝種交代、刃物類による厚さ 0.2 ㎜ほどの直線に切り出す貝加工技術の出現、蒔絵装飾の丁寧さに比べ粗さが目立つ螺鈿装飾など、南蛮漆器登場の裏には歴史的環境を含めたさまざまな外的影響を考慮する必要がある。また同時期には沖縄製ともインド製とも言われている南蛮螺鈿漆器類似の異系統螺鈿器が存在しており、この時代の螺鈿を考える際には、相対するヨーロッパだけでなく、彼らが来航する経路上のアジア各地域との影響関係や交易といった側面も視野に入れてその複雑な交流実態を具体的に解き明かしていく必要があった。

そこで本研究は、螺鈿器物の観察によって理解されるモノが示す事実を出発点として、それに種々の検討を加えることで、予見されるこうした複雑な時代の実態や背景を読み解いていくことを目的・目標として進めたものである。

なお、当該期に起きた日欧間の文化的相互影響関係をより多眼的に検討するため、おそらく他に類例がまったく存在しない、甲賀市水口伝世の国内製十字形洋剣（レイピア）についても研究を進めた。

３．研究の方法

本研究では各地に所在する数々の螺鈿作品などに対する人文学的研究を基軸とし、これに各種の自然科学的な分析手法を可能な範囲で適宜適用、その上で明らかになった事実の解釈と両者の総合化により具体的な事実を明確にして歴史理解の検討へと進むという手順方法で行った。

(1)人文学的研究

人文学的研究とは、各調査作品の器形、螺鈿・漆工文様や装飾金具等に対する観察、および対象作品全体あるいは部分の撮影画像による美術史的様式研究や型式学研究、技術史研究などの検討を中心とし、さらに文献史料記録なども適宜参照した。そしてこうした方法により螺鈿器の

分類と制作地判断、螺鈿器の系譜（先後関係）や編年研究、またより詳細な実年代の限定といった検討作業を進めた。

（2）自然科学的研究
この分野に対する自然科学的分析手法としては、ストロンチウム・酸素同位体分析による漆の産地研究、樹種同定、漆の熱分解 GC/MS 分析、クロスセクション分析、走査電子顕微鏡を利用した詳細な蒔絵・箔絵・金泥などの製作技術および材料特定、あるいは CT スキャニング分析などが行われている。本研究では、分担者が専門とする前二者を中心に行ったが、適宜状況に応じてこれ以外の分析を専門とする研究者の研究も取り入れて進めた。なお、文化財、特に美術品では非破壊分析にほぼ限定され多くの場合サンプルの入手は困難なため、同位体分析研究は基礎研究が中心となった。また、樹種同定についても経年劣化で落下することが多い漆塗膜に比べ木材サンプルの入手は困難であることから、目視による確認や CT スキャニング画像によるおおよその判断が中心となり、厳密な意味での樹種同定には至らないという限界も生じた。

４．研究成果
本研究による研究成果については、ａ.調査（日本国内および海外）、ｂ．成果の公開・学会発表・講演といった口頭発表、ｃ．論文・図書、といった印刷物・あるいはデジタル情報での成果の公開に区分する。以下、年度別にそれぞれ概要を述べる。

(1) 調査
① 日本国内
2015 年度
国内各地（浦添市美術館、大津市西教寺、角屋、甲賀市水口歴史民俗資料館・南蛮文化館ほか）において、各時代の伝世螺鈿・漆器や関連作品に対する調査を実施した。さらにいくつかの調査地においては研究分担者らとの共同調査も実施した。
2016 年度
逸翁美術館、広島県立美術館において南蛮漆器の熟覧調査、またいくつかの館で開催された南蛮漆器に関する展覧会出陳作の調査、甲賀市藤栄神社に伝わる十字形洋剣（水口レイピア）について、国内金工・刀剣研究者や文化財科学者らとの熟覧調査と京都国立博物館での CT スキャニング調査を実施。
2017 年度
甲賀市立水口歴史民俗資料館にてメトロポリタン美術館の西洋武器類専門家による十字形洋剣（水口レイピア）調査を実施、また。報告書作成に向けたその画像撮影を実施。奈良国立博物館にて南蛮文化館所蔵南蛮漆器の X 線 CT スキャニング調査。
2018 年度
奈良国立博物館にて３D 模型制作を目的とした甲賀市藤栄神社所蔵十字形洋剣（レイピア）柄部分の CT スキャニング調査および研究協議を実施したほか、SPring-8 にて放射光による同剣身部の構造調査。岐阜市歴史博物館にて同館所蔵南蛮漆器類の追加調査を実施した結果、漆塗膜下に多数の墨書文字を確認されたほか、長崎歴史文化博物館でも南蛮漆器の調査を実施。
2019 年度（繰越しした 2021 年度までの３ヶ年に実施）
南蛮文化館、岬町理智院、豊国神社、尼崎市寶樹院にて桃山時代から江戸時代初期にかけての希少な国内向け螺鈿器や漆器類の調査。また正倉院事務所にて唐代螺鈿鏡の調査方法や材料に関する調査実施。また白鶴美術館・兵庫県立古代鏡展示館にて唐代螺鈿鏡および平脱鏡の調査を有機化学研究者と共同で実施し、今後の分析研究に向けた基礎情報を得た。また茨木市において千提寺・下音羽地区伝世のキリスト教器物についての調査を実施し、当該期におけるヨーロッパ文化からの影響関係について国内向け・国外向けキリスト教具双方のより幅広い視点による理解を試みた。

② 海外
2015 年度
海外各地（バンコク市内寺院および同郊外螺鈿工房、浙江省博物館、韓国国立中央博物館・慶山市立博物館・慶北大学校博物館・城南市内および広州市内螺鈿工房ほか）でタイの近世近代螺鈿および日本からの輸出螺鈿調度の調査および現代螺鈿制作技術・材料調査、中国螺鈿漆器類の調査、朝鮮時代螺鈿漆器および現代螺鈿漆器制作技術の調査をそれぞれ実施した。
2016 年度
研究分担者や研究協力者と共にポルトガル国内各地で同国内伝世の各種南蛮漆器やアジア・ポルトガル様式南蛮漆器類似漆器類などの総合調査を実施、またイスタンブールのトルコ・イスラム美術館にてイスラム螺鈿器の調査を行い東アジア製キリスト教器物との比較検討実施。
2017 年度
中国山東省荷澤市博物館にて元代の内陸運河沈没船より出土した高麗螺鈿漆器様式経箱の実見調査、また済南市・開封市・洛陽市・北京市などで陶磁器の基準資料など関連資料の調査。コペンハーゲンの国立ﾃﾞﾝﾏｰｸ博物館ほかにて南蛮漆器類や関連漆器また西洋式細形長剣（レイピア）などの調査、スウェーデンにて王室所蔵南蛮漆器洋櫃および武器類などの調査、ローマ市内

およびバチカンにて伊達政宗からローマ教皇宛の贈答品である個人蔵南蛮漆器洋櫃や関連資料の調査を実施。

2018 年度

シンガポール国立アジア文明博物館にて近年同館が収集した南蛮漆器類似螺鈿漆器の調査、同国立遺産保護修復センター（HCC）ほかにおいて南蛮漆器類の調査・研究協議を行い、新たな南蛮漆器類似アジア製聖龕を確認。インドネシア・ジャカルタ歴史博物館などで歴代バタビア総督関係品ほかの調査、フィリッピン国立人類学博物館でスペイン沈没船出土の藤栄神社所蔵十字形洋剣柄部と酷似するレイピアの柄部を確認、またイスラム教器物の調査。イントラムロス地区で華僑関係螺鈿器の確認。イギリスにてオークション出品南蛮漆器、V&A ミュージアム所蔵で日本国内にも伝世する 16 世紀後半代のヴェネチア製螺鈿器調査、ウィンザー城にて王室所蔵南蛮漆器類を調査した。また上海で開催された国際研究会に併せて上海博物館での漆器特別展出品作等の調査のほか、北京紫檀博物館、揚州漆器工房および古琴工房にて調査を実施、また別途、北京考古研究所や山西博物院などにて殷周代螺鈿器、浙江省博物館にて元明清代螺鈿器、さらに温州博物館と同市内の私立博物館にて宋代無文漆器とアジア各地の螺鈿コレクションについて調査した。

2019 年度

韓国国立慶州博物館で統一新羅時代平脱漆器調査。ドーハのイスラム美術博物館での同館所蔵イスラム螺鈿器調査、リスボン市内各所およびスペイン・グアダルーペのサンタマリア修道院ほかスペイン国内各地での伝世南蛮漆器類調査。またオランダのホールンにてバタビア総督クーンに関連する資料調査を実施。

(2) 成果の公開・学会発表・講演など

2015 年度

バンコクで開催された第 2 回オリエントの漆国際会議(The Second International Conference "Study of Oriental Lacquer Initiated by H.R.H. Princess Maha Chakri Sirindhorn for the Revitalization of Thai Wisdom）にて、Technical Similarity of the Making of Mother-of-Pearl Inlay between Thailand and Mughal India（「タイとムガール調インド螺鈿の技術的類似性」）と題してインド製樹脂地螺鈿器の文様と 15 世紀から 17 世紀にかけての東アジア螺鈿漆器との関係性、またインド螺鈿とタイ螺鈿の関係性について発表。

2016 年度

明治大学で開催された漆サミット 2016 において「ポルトガルに伝世する南蛮漆器及び関連漆器の現況」という題名でポルトガル国内に伝世する南蛮漆器状況について報告、また浦添市美術館で開催された「琉球の漆文化と科学 2016～螺鈿と文化～」において「アジアの螺鈿史瞥見ー真珠光沢への希求ー」という題名でアジアの螺鈿史概要について講演した。また東京文化財研究所にて「南蛮漆器の多源性を探る」というテーマでパネリスト 11 名による公開研究会（シンポジウム）を開催、十数名の海外参加者に加え国内からも多数が参加。海外参加者のうち希望者に対して近代螺鈿漆工装飾で知られる目黒雅叙園へのエクスカーション開催、海外パネリスト 2 名と徳川美術館、南蛮文化館、浦添市美術館などでの漆器類調査や意見交換を実施。

また甲賀市藤栄神社所蔵十字形洋剣について、この時までに実施してきた調査検討結果について東京文化財研究所で開催した研究会において 5 名の研究者による発表および討論を行なった。

2017 年度

浦添市美術館の特別講演会『スウェーデン王国の漆器と文化』および公開シンポジウム「輸出漆器をめぐる文理融合の可能性」において「ヨーロッパに伝わる日本の輸出漆器―南蛮漆器の謎にせまる」と題して南蛮漆器の全体像や具体的様相、また編年的な見通しや実年代などについてそれまでの研究成果を踏まえた概要を講演。また、メトロポリタン美術館の西洋武器類専門家による現地調査成果を東京文化財研究所の研究会での速報的な研究発表により、この剣、特に柄部がヨーロッパ製ではなく日本製であるという見解の公表を得た。このほか、タイ在住の研究協力者により東京文化財研究所の研究会にて「タイにおける螺鈿工芸の変遷とその意味」と題し、過去ほとんど研究が行われていないタイの近世近代螺鈿についての変遷内容を中心とする発表がなされた。

2018 年度

日本文化財科学会第 35 回大会において代表者を含む 8 名が共同で「南蛮文化館所蔵南蛮漆器類の X 線 CT 調査」というポスター発表を行い、また上海で開催された中国古代漆器国際学術研討会において「中国における漆地螺鈿の成立と発展ー螺鈿史上の古代・中世とその画期」という題名にて発表した。

2019 年度

第 25 回 ICOM 京都大会において ’Minakuchi Rapier, European Sword produced in Japan ’（「水口レイピア 日本で造られたヨーロッパの剣)）というタイトルで「水口レイピア」の研究成果について英語により研究協力者との共同発表を行ったほか、東京文化財研究所第 53 回オープンレクチャーにて「日本唯一の伝世洋剣、水口レイピアの調査と研究」、甲賀市水口町郷土史会でも「藤栄神社所蔵「十字形洋剣」の謎に挑む―水口レイピア 日本で造られたヨーロッパの剣」と題して、この剣についてのこれまでの研究成果についてそれぞれ一般および地元の人々を対

象に講演し、成果の公開周知に努めた。また東京文化財研究所の研究会にて「南蛮漆器成立の経緯とその年代―キリスト教聖龕を中心とする検討―」という題名で、南蛮漆器聖龕や国内向けに造られたキリスト教聖龕の成立年代やその経緯についての検討内容を発表した。

(3) 論文・図書などによる成果の公表

2015 年度

代表者は『美術研究』417 号に「南蛮漆器書見台試論」を発表し、その変遷や年代について検討したほか、キリスト教器物は 1613 年の禁教以後には造られなかったという広く認められている定説に対して疑問を投げかけた。また、代表者は『小原流 挿花』777 巻にて「きらめく螺鈿」という題名で、アジア各地の螺鈿についてカラー写真とともに概要を紹介し螺鈿の多様性について一般への周知を図った。

2016 年度

本年度代表者は真珠科学研究所の研究者と試みた夜光貝と鮑貝の科学的な識別方法の開発経過について宝石学会（「螺鈿に使われる貝殻の分析―主にヤコウガイ、アワビについて」）および文化財保存修復学会（「螺鈿に使われる貝殻の構造的特徴―ヤコウガイ、アワビについて」）にて発表し、その概要を両学会要旨集に報告した。また、南蛮漆器多源性について人文・自然科学各研究者らと共に発表討議した国際研究会では概要を『公開研究会予稿集南蛮漆器の多源性を探る』という冊子およびデジタルデータとして公開した。

2017 年度

本年度代表者は『西洋を魅了した「和モダン」の世界』（三樹書房刊）にて金子皓彦氏との対談形式で、日本の輸出漆器である南蛮漆器や幕末から近代にかけての駿河漆器や会津漆器について論じた。このほか、研究協力者が『美術研究』426 号に「螺鈿と王権―近世近代タイ装飾美術の含意―」を寄稿。

2018 年度

中国上海博物館にて開催された中国古代漆器国際学術研討会に際して発刊された『中国古代漆器国際学術研討会 論文稿』に代表者は「中国における漆地螺鈿の成立と発展―螺鈿史上の古代・中世とその画期」という論文を寄稿し、中国螺鈿史では北宋初期と北宋末期の螺鈿に文様と螺鈿貝片加工方法といった制作技術の両面に相当大きな変化が認められ、この時期が中国における螺鈿史の古代と中世の分岐点になるという新たな考え方を提示した。

2019 年度

最終年度は代表者が韓国国立中央博物館美術部の定期刊行誌である『美術資料』の 95 号に「東アジア螺鈿史の観点から見た高麗螺鈿の成立」を寄稿し、韓国における螺鈿の成立が高麗時代 11 世紀前半頃と推測されること、そしてこれまで現存する作例でその独自性が強調されてきた 12 世紀以降の高麗螺鈿は中国北宋末以降の螺鈿と密接な関係を持って成立したと見るべきであることを論じた。また同年、同じく韓国国立中央博物館の保存科学部が刊行した報告書『保存と復元 螺鈿漆器』に代表者は日本の螺鈿史についての執筆を求められ、「日本螺鈿史試論―覚書として」を寄稿し、日本における螺鈿制作の成り立ちから近世末までの螺鈿史の概要を述べるなかで、日本螺鈿史における古代と中世の画期、中世末から桃山時代にかけての螺鈿の衰退、江戸時代以降には中国系螺鈿が一般的に広がっていた可能性といった諸点について論じた。また、研究協力者が『美術研究』429 号に「南蛮漆器を中心とした平蒔絵技法と材料に関する検討―走査型電子顕微鏡を利用した金属材料形状の分析―」を寄稿。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 鳥越俊行、小林公治、能城修一、北村繁、清水健、田澤梓、安藤真理子、矢野孝子	４．巻 35
２．論文標題 南蛮文化館所蔵南蛮漆器類のX線CT調査	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本文化財科学会第35回大会研究発表要旨集	６．最初と最後の頁 224-225
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小林公治	４．巻 単巻
２．論文標題 中国における漆地螺鈿の成立と発展ー螺鈿史上の古代・中世とその画期	５．発行年 2018年
３．雑誌名 中国古代漆器国際学術研討会論文稿	６．最初と最後の頁 138-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小林公治	４．巻 417
２．論文標題 南蛮漆器書見台編年試論	５．発行年 2016年
３．雑誌名 美術研究	６．最初と最後の頁 43,64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小林公治	４．巻 777
２．論文標題 きらめく螺鈿	５．発行年 2015年
３．雑誌名 小原流 挿花	６．最初と最後の頁 22,24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林公治	4．巻 0
2．論文標題 ポルトガルに伝世する南蛮漆器及び関連漆器の現況	5．発行年 2016年
3．雑誌名 漆サミットプログラム	6．最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林公治	4．巻 0
2．論文標題 アジアの螺鈿史瞥見―真珠光沢への希求―	5．発行年 2016年
3．雑誌名 琉球の漆文化と科学2016～螺鈿と文化～	6．最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林公治	4．巻 95
2．論文標題 東アジア螺鈿史の観点から見た高麗螺鈿の成立	5．発行年 2019年
3．雑誌名 美術資料	6．最初と最後の頁 43-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小林公治	4．巻 0
2．論文標題 日本螺鈿史試論―覚書として	5．発行年 2019年
3．雑誌名 保存と復元の世界 螺鈿漆器	6．最初と最後の頁 154-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高田知仁	4．巻 426
2．論文標題 螺鈿と王権―近世近代タイ装飾美術の含意―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 美術研究	6．最初と最後の頁 25-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 神谷嘉美	4．巻 429
2．論文標題 南蛮漆器を中心とした平蒔絵技法と材料に関する検討―走査型電子顕微鏡を利用した金属材料形状の分析―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 美術研究	6．最初と最後の頁 43-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　2件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 鳥越俊行、小林公治、能城修一、北村繁、清水健、田澤梓、安藤真理子、矢野孝子
2．発表標題 南蛮文化館所蔵南蛮漆器類のX線CT調査
3．学会等名 日本文化財科学会第35回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 小林公治
2．発表標題 中国における漆地螺鈿の成立と発展ー螺鈿史上の古代・中世とその画期
3．学会等名 中国古代漆器国際学術研討会2018（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 小林公治
２．発表標題 ヨーロッパに伝わる日本の輸出漆器―南蛮漆器の謎にせまる
３．学会等名 浦添市美術館特別講演会『スウェーデン王国の漆器と文化』
４．発表年 2018年

１．発表者名 小林公治
２．発表標題 ヨーロッパに伝わる日本の輸出漆器―南蛮漆器の謎にせまる
３．学会等名 公開シンポジウム「輸出漆器をめぐる文理融合の可能性」
４．発表年 2018年

１．発表者名 矢﨑純子、南條沙也香、小林公治、松田泰典、小松博
２．発表標題 螺鈿に使われる貝殻の分析―主にヤコウガイ、アワビについて
３．学会等名 宝石学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 矢﨑純子、南條沙也香、小林公治、松田泰典、小松博
２．発表標題 螺鈿に使われる貝殻の構造的特徴―ヤコウガイ、アワビについて
３．学会等名 文化財保存修復学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 Koji Kobayashi
２．発表標題 Technical Similarity of the Making of Mother-of-Pearl Inlay between Thailand and Mughal India
３．学会等名 The Second International Conference "Study of Oriental Lacquer Initiated by H.R.H. Princess Maha Chakri Sirindhorn for the Revitalization of Thai Wisdom（国際学会）
４．発表年 2015年

１．発表者名 小林公治
２．発表標題 ポルトガルに伝世する南蛮漆器及び関連漆器の現況
３．学会等名 漆サミット
４．発表年 2016年

１．発表者名 小林公治
２．発表標題 アジアの螺鈿史瞥見―真珠光沢への希求―
３．学会等名 琉球の漆文化と科学2016～螺鈿と文化～
４．発表年 2016年

１．発表者名 KOBAYASHI Koji, NAGAI Akiko
２．発表標題 Minakuchi Rapier, European Sword produced in Japan
３．学会等名 第25回ICOM （国際博物館会議）京都大会2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小林公治
２．発表標題 「日本唯一の伝世洋剣、水口レイピアの調査と研究
３．学会等名 第53回オープンレクチャー
４．発表年 2019年

１．発表者名 小林公治
２．発表標題 藤栄神社所蔵 「十字形洋剣」 の謎に挑むー水口レイピア　日本で造られたヨーロッ パの剣
３．学会等名 水口町郷土史会創立 60 周年記念講演会（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 小林公治ほか	４．発行年 2017年
２．出版社 東京文化財研究所	５．総ページ数 41
３．書名 公開研究会予稿集増補版 南蛮漆器の多源性を探る 印刷版 pdf版	

１．著者名 金子皓彦・小林公治ほか	４．発行年 2017年
２．出版社 三樹書房	５．総ページ数 221
３．書名 西洋を魅了した「和モダン」の世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	吉田　邦夫 (Yoshida Kunio) (10272527)	東京大学・総合研究博物館・特招研究員 (12601)	
研究分担者	能城　修一 (Noshiro Shuichi) (30343792)	明治大学・研究・知財戦略機構・客員教授 (32682)	
研究分担者	末兼　俊彦 (Suekane Toshihiko) (20594047)	独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・学芸部工芸室・主任研究員 (84301)	
研究分担者	鳥越　俊行 (Torigoe Toshiyuki) (80416560)	独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・その他部局等・室長 (84603)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	永井　晃子 (Nagai Akiko)		甲賀市教育委員会
研究協力者	高田　知仁 (Takata Tomohito)		タイ、サイアム大学
研究協力者	神谷　嘉美 (Kamiya Yoshimi)		金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 　公開研究会　南蛮漆器の多源性を探る	開催年 2017年～2017年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関